

受験番号					
------	--	--	--	--	--

社会科学

問題冊子

指示

合図があるまでは絶対に中を開けないこと

1. この試験は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができるかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に40の問題（1-40）があります。配点は80点満点です。
解答カードには表裏あわせて100の解答欄がありますが、41以降は使用しないでください。
3. 解答のための時間は、正味70分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて70分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります。答えの記入のしかたが指示どおりでないと、正解でも無効になります。
5. 答えはすべて、解答カードの定められたわくの中に鉛筆を用いて書いてください。
それ以外のところに書いたり、また答え以外のものを書きこんだりすると無効になります。
6. 一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを定められたとおりに、はっきり書いてください。
7. メモにはこの問題冊子の余白を用い、ほかの紙は使用しないでください。
8. 「解答やめ」の合図があったら、ただちにやめてください。試験監督が問題冊子と解答カードを集め終わるまでは、退室できません。
9. この指示について質問があるときは、試験監督に聞いてください。ただし問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答カードの定められたところに忘れずに書きいれること

はじめに

グローバル化という言葉が、時代のキーワードとなっている。「世界のグローバル化が進む中」—こうした表現が、決まり文句のように、いたる所で聞かれる。人、物、情報がめまぐるしく行き交う中で、ふと立ち止まって考えれば、いろいろな問い合わせてくる。世界のグローバル化はどこまで進むのか。各地に根ざした文化や言語はどのような影響を受けるのだろうか。私たち一人ひとりの思考の枠組みや価値観はどう変わらるのか、またどうあるべきか。世界を構成するさまざまな要素とのつながりの中で、個人はどのような発展性を持っているのだろうか。人間は社会的動物である。社会、時代と人間との関係は、古今東西を通じての普遍的なテーマであった。私たちもここで、グローバル化時代における世界とその中の個々の要素、特に私たち個人との関係について考えていく。

まず、グローバル化という言葉を私たちはどのように理解して使っているだろうか。例えば、多国籍企業、多文化社会、インターネットによる情報検索や意見交換、あるいは環境問題や人権活動といった例を考えると、人、物、情報の地球規模の複合性や交流のイメージがつかめるだろう。また、グローバル化という用語は、「何かがグローバルになる」という現象を表すとともにあれば、「何かをグローバルにする」という主体的な行為を表すこともあることに注意したい。では、もう一步ふみこんで考えてみよう。

さかのぼって18世紀以降、イギリスを皮切りとした産業革命とそれに伴う資本主義社会の発展により、植民地支配を含む「世界の一体化」が進んだ。これをグローバル化の始まりととらえる見方もある。しかし、現代のグローバル化は、こうした国家の領土拡大とは目的も性質も異なっている。20世紀後半の高度情報化および通信技術の進歩により、各種の情報がコンピュータネットワークを介して世界各地で共有されるようになった。また輸送手段の発達によって、物理的な移動も容易になった。こうした技術的な進歩を背景として、現代のグローバル化は、各種の組織や活動団体、そして個人が、目的や状況に合わせて柔軟で流動的な関係を持つことを特徴としている。それに対して18世紀以降の「世界の一体化」は、たしかに本国と植民地をつなぐものではあったが、同時に、列強による「世界の分割」ともなっていたのである。

グローバル化の対概念となるのは、「ローカル化」という言葉であろう。ローカル化は、単純に活動などの規模が小さくなることを指すだけでなく、ローカルな要素や多様性が発達することを指す場合もある。注意すべきことであるが、ローカル化を「反グローバル化」と混同してはならない。なぜならば、反グローバル化という言葉が、格差拡大や文化の均質化などグローバル化の否定的な側面を批判する場合に用いられる点でグローバル化に対抗する意味合いを

持っているのに対して、「ローカル化」はグローバル化の是非に関して中立的な概念だからである。

何をグローバルとみなし何をローカルとみなすかの方法は一通りではない。すなわち「グローバル／ローカル」は相対的な区別である。例えば、ある日本企業がタイとベトナムに工場を作つて現地の人を雇用したとしよう。この場合、国内規模と対比させて、また今後のさらなる発展を想定して、グローバルな事業展開と見ることができる。一方、世界各地への進出と比べて、アジア内のローカルな事業展開と見ることもできる。また、「グローバル／ローカルな視点から物事を見る」といった場合、「グローバル／ローカルな視点」は、「マクロ／ミクロな視点」と同義である。さらには、岡村圭子氏が指摘するように、「グローバル化／ローカル化」は、「遠心的な方向性／求心的な方向性」をも意味する。上述の日本企業のアジア進出の例は、遠心的な動きとしてのグローバル化と言える。「グローバル／ローカル」のこれらの意味において、「グローバル」の規模は文字通り地球規模である必要はなく、むしろ広がりや動きの方向性にポイントがあるといえる。

ところで、グローバル化とローカル化との間には、興味深い相補性が見られる。グローバル化によって均質化が進む場合もあるが、その逆にローカルな多様性が促される場合も多い。例えば、マクドナルドが世界各地に進出して、見慣れたロゴが各地の風景に現れるが、地域に固有のハンバーガーが考案されることもある。また、海外経験を通して、それまで空気のような存在だった自国の言葉や文化に対して興味がわくこともある。あるいは、後で触れるように、英語が世界各地で話されるようになると、現地の言語の特徴をとりこんだ多様な英語変種が発生してきた。あるいはまた、日本における女性の社会進出を欧米並みのレベルに上げようすれば、日本に固有の問題に取り組む必要が出てくる。これらはみな、グローバル化がローカル化を促す例とみなせる。

さて、私たちの思考や学びにも、グローバル化の概念をあてはめることができる。個人の内面のグローバル化は、社会的環境のグローバル化と相互に関連しながらも、それとは区別されなければならない。すなわち、たとえ鎖国時代であっても、内面的なグローバル化は可能であつただろうし、その逆に、社会的環境のグローバル化が進展したとしても、内面的なグローバル化が進まないということもあり得る。個人の思考や学びにも、「視野を広げる／自己の内面を見つめる」、「知識を広げる／深める」などといった「遠心的／求心的」な対照要素が関わっており、内面的な「グローバル化／ローカル化」として理解できる。では、両者には具体的にどのような相互作用や相補性があるのだろうか。以下では、ケーススタディを通して、いろいろな次元でのグローバル化とローカル化を観察していこう。

夏目漱石の学び

今からちょうど 100 年前の 1914 年 11 月、夏目漱石（1867 – 1916）は学習院大学で「私の個人主義」と題した講演を行った。漱石は、明治維新の前年に生まれ、文明開化と歩みを共にした。この時代には西洋文化が急激に流入し、さまざまな社会的、文化的な変化とともに、人々の精神的変化をもたらし、なかでも個人主義思想の影響は大きかった。漱石は、そうした西洋化の中で自らが経験した内面的葛藤と発見を、若い大学生たちに熱く語ったのである。

漱石は、東京帝国大学で英文学を専攻し、英国人の教員による英語や英文学についての授業を受けた。しかしそうやって 3 年間勉強したにもかかわらず、結局のところ「解らずじまいだった」のである。

私はこの世に生まれた以上何かしなければならん、といって何をしてよいか少しも見当がつかない、私はちょうど霧の中に閉じ込められた孤独の人間のように立ちすくんでしまったのです。……あたかも囊の中に詰められて出ることのできない人のような気持ちがするのです。私は私の手にただ一本の錐さえあればどこか一ヵ所突き破ってみせるのだがと、焦り抜いたのですが、あいにくその錐は人から与えられることもなく、また自分で発見する訳にもいかず、ただ腹の底ではこの先自分はどうなるだろうと思って、人知れず陰鬱な日を送ったのであります。

この苦悩は、その後のイギリス留学中も続く。

どんな本を読んでも依然として自分は囊の中から出る訳に参りません。この囊を突き破る錐は倫敦中^{ロンドン}探しても見つかりそうになかったのです。……

しかし、次第に「錐」の一部が見えてくる。

この時私ははじめて文学とはどんなものであるか、その概念を自力で作り上げるよりほかに、私を救う途はないのだと悟ったのです。今まで全く他人本位で、……他人本位というのは、自分の酒を人に飲んでもらって、後からその品評を聴いて、それを理が非でもそうだとしてしまう人真似を指すのです。……その頃は西洋人のいう事だといえば……自分の腑に落ちようが落ちまいが、むやみにその評を触れ散らかすのです。つまり鵜呑みと云つてもよし、……しかるに時代が時代だから、またみんなそれをほめるのです。

漱石は、「自分の腑に落ちる」ことが文学を理解する上で一番大事だと悟る。英文学においては、英国人と日本人の国民性の違いや個人差が、理解の違いを生じることに気がついた。

私が独立した一個の日本人であって、……世界に共通な正直という徳義を重んずる点から見ても、私は私の意見を曲げてはならないのです。……普通の学者は単に文学と科学とを混同して、甲の国民の気に入るものは乙の国民の賞賛を得るにきまっている、そうした必然性が含まれていると誤認してかかる。……たとえこの矛盾を融和することが不可能にしても、それを説明する事はできるはずだ。……こう私は悟ったのでした。

そして遂に彼の「錐」を得る。

一口でいうと、自己本位という四字をようやく考えて、その自己本位を立証するために、科学的な研究やら哲学的な思索に耽りだしたのであります。……今まで霧の中に閉じ込められたものが、ある角度の方向で、明らかに自分の進んでいくべき道を教えられた事になるのです。

漱石は、若い学生たちに、この自己本位の姿勢で自分の人生を切り拓くよう激励している。さらに、自己本位は他人の「自己」をも尊重する公平な態度を意味することを強調している。

漱石の話の内容には、いくつかの重要な示唆が含まれている。特に注目したいのは、漱石が、自己本位という概念の根拠を、文学とは直接関係のない科学や哲学という分野に求めたという点である。これは何を意味しているのか。

英文学を究めるのに、英文学の分野で定着した方法論と知識だけで足りるだろうか。文学全般、ひいては学問全般における普遍的な道具立て——具体的にいえば、論理的な思考、客観的な証拠に基づく実証、人間の認識についての理解など——も必要になるのではないだろうか。まさに漱石は、科学や哲学に目を向けて、そうした道具立てを得たように思われる。実際、英留学後に書かれた『文学論』では数式的な表現が用いられているし、『坊ちゃん』や『吾輩は猫である』などの文学作品は、ニーチェ哲学や禅思想からの影響も受けていると言われている。一般的に見ても、創造的な仕事は、さまざまな分野の知識や技術の有機的な体系の習得と、特定の分野や課題における集中的な取り組みの両方によって可能になることが多い。漱石の学びを振り返ると、英文学に目を向けたグローバル化、自己本位というローカル化、さらに自己本位の概念的基礎を科学や哲学に求めたグローバル化のプロセスを経て、これらが互いに関連し合っていることがわかる。漱石の「錐」は、グローバルな視点とローカルな視点を組み合わせることから生まれたといえる。

漱石はまた、英文学において、英国人による解釈を無批判に受け入れることに抵抗した。英文学を学ぶ以前に、俳句や漢詩を通して文学的な素養を身に着けていた漱石にしてみれば、英文学にそうした素養や直感が入り込む余地がなかったことは、納得できなかったに違いない。実は、漱石の感じた違和感は英文学にとって重要な意味を持つ。それは、英文学に日本人の新

しい視点から新しい解釈の可能性が与えられるからである。ここで「英国人による英国人のための英文学」だったものが経験するのは、自己相対化と呼ばれるものにはかならない。英国人のローカルな視点で捉えられていた英文学を、日本人の視点で捉え直すことは、複数の異なった視点で英文学という対象を見ることである。こうした視点のグローバル化により、英文学は自己の相対化を行うのである。このような自己の相対化には2つの面が伴っている。第一の面は、自分をグローバルな視点にさらすことであり、それはグローバル化である。第二の面は、自分のローカルな位置づけを正しく理解することであり、それはローカル化である。自己相対化の2つの面は、広い世界に身を置くことで自己の相対的な位置づけが正しく認識されることを示している。このように見ると、自己相対化がグローバル化とローカル化の相補的関係を示す1つの事例であることが理解できる。自己相対化は、人間に対しても広く適用される。そして、この反対の状況を示すのが、まさに「井の中の蛙」なのである。明治維新の時代を生きた漱石の話には、現代のグローバル化社会に生きる私たちにとっても新しいメッセージが多く含まれている。

では次に、漱石の講演から離れて、グローバル・コミュニケーションにおける言語の問題に目を向けて、グローバルな言語としての英語やインターネットにおける言語の問題について考えてみたい。

グローバル・コミュニケーションの言語的側面

英語が世界各地の人々に話される過程で、音韻面を中心にさまざまな英語変種が生まれた。英語は今や、EnglishではなくWorld Englishesなのである。英語の普及（グローバル化）が英語の多様性（ローカル化）を引き起こしている。

英語変種は話者の母語の特徴を反映するため、聞き手側に言語偏見を生じさせる傾向のあることが実験的に示された。CargileとGilesは1998年に、アメリカ人の英語母語話者が日本人の英語学習者（日本語なまりが弱い人と強い人の2種類）に対して持つ「言語態度」を調べた。その結果、同じ内容が話されても、英語に含まれる日本語なまりによって、話者に対する人物評価が異なっていることが示された。人物評価には3つの評価尺度、すなわちステイタス（社会的な地位）、対人的な魅力、およびダイナミクス（行動的で自信に満ちていること）が使われた。結果の概略は次の通りである：①各項目とも、母語話者に対する評価が高かった、②日本語なまりが強いほど、ステイタスや対人的な魅力の評価が低くなった、③ダイナミクスについては、日本語なまりが弱いよりもむしろ強い方が評価が高くなかった。

ここに見られるように話される英語を話者の人物評価に結びつければ、形式と内容を混同していることになる。こうした混同は、漱石の時代に多くの人々が、英国人による英文学を鵜呑

みにしていた状況と似ている。なぜならば、そこでは英国人という属性と英文学という分野とが重ねて捉えられていたからである。

興味深いことに、英語変種は、話す側にとっては肯定的な面がある。例えば、フィリピンではアメリカの植民地政策で英語が導入されたが、その際、現地のタガログ語と融合した英語変種が生まれた。フィリピン人の大学生に対して行われた予備調査では、彼らが公私の場で「フィリピン英語」を積極的に話していることが報告されている。共通語としての英語の利点を享受することができる一方、変種を使うことでフィリピン人としてのアイデンティティを感じることができるという。

言語は文化的な背景と密接に関わっている。イギリス英語やアメリカ英語を正しく話すには、イギリスやアメリカの文化的な要素も併せて学ぶ必要が生じる。しかし、グローバルな環境では必然的に、多様な言語的、文化的背景を持つ人々が英語を話すことになる。したがって、グローバルなコミュニケーションの手段がイギリス英語とアメリカ英語に限定されれば、さまざまな母語および文化的背景を持つ話者が、イギリスやアメリカの言語的、文化的な土台の上に立たなければならなくなる。ここに無理が生じる。また、非母語話者が「所詮、母語話者のようには話せない」というあきらめから、英語の学習に対して消極的になるという事例も報告されている。

こうした事実を背景にして、近年は、多様な英語変種を尊重する傾向が見られるようになつた。英語教育の現場でも、特定の目的に合わせた英語変種がモデルとして採用される例が出てきた。こうした動きは、グローバルなコミュニケーションにおいて言語偏見を防ぐことにつながる。さらには、非母語話者に対して、「英語以外の母語を持っている」という肯定的な見方もできるようになる。英語使用環境のグローバル化が、英語の種類や評価についてのローカル化をもたらしているのである。

ところで、こうした英語変種の受容と対照的な方向性も見られる。すなわち、グロービッシュ(Global + English → Globish) というものが提案され、注目されている。これは、グローバルなコミュニケーションを目的として中立化および簡易化した英語を考案し、それを多様な言語背景の人々が共有する試みである。語彙や表現を簡素で平易なものとし、発音も話者の母語の影響を克服できるように工夫されている。ここでは、英語使用環境のグローバル化が、英語の構造そのもののグローバル化をもたらしている。このように英語のグローバル化においても、グローバル化とローカル化の相互作用が明確に認められるのである。

グローバル化と言語の問題を考える場合、グローバル化時代の有力な情報利用ツールであるインターネットにおける言語についても考察すべきであろう。

表1は、インターネット利用者上位10位の言語についての統計データを示したものである。初めにデータの説明をしておく。最初の項目は、元データでは「話者人口」となっていたが、

詳細が不明のため、ここでは「公用語話者人口」（その言語を公用語とする国々の人口の合計）として扱うこととする。例えば、英語とフランス語を公用語とするカナダの人口は、英語とフランス語それぞれの公用語人口に加えられる。（1ヵ国語しか話さないカナダ人の分は、誤差が生じる。）「母語話者人口」は、その言語を母語（幼少期から自然に習得した言語）とする人の数である。例えば、日本人の多くが日本語の母語話者である。「非母語話者」は、その言語を学習して習得した話者である。日本人の多くは英語の非母語話者である。「ネット利用者」は、インターネット上でその言語を主に使う人の数である（各自1つの言語を選んだものと想定する）。「言語のインターネット普及率」は、当該言語のネット利用者数の、公用語人口に対する割合である。仮に、ある言語の「ネット利用者」が、その言語を公用語としない国にも多くいた場合、「言語のインターネット普及率」は100%を超える場合もあり得る。

1位の英語と2位の中国語は、データが類似しているが、インターネット普及率の成長率が大きく異なる。中国語は最近10年の普及が著しい。4位の日本語と6位のドイツ語は、公用語話者人口は多くないがネット普及率が高いため、上位に来ている。

表1 インターネット利用者数上位10位の言語（2010年現在）

順位	言語	公用語話者 人口 (億人)	母語話者 人口 (億人)	ネット 利用者 (億人)	全ネット人口 に対する割合 (%)	言語の インターネット 普及率 (%)	2000-2010年 の、左記普及率 の成長率 (%)
1	英語	12.78	3.35	5.37	27.3	42.0	281.2
2	中国語	13.66	11.97	4.45	22.6	32.6	1,277.4
3	スペイン語	4.20	4.06	1.53	7.8	36.5	743.2
4	日本語	1.27	1.22	0.99	5.0	78.2	110.6
5	ポルトガル語	2.50	2.02	0.83	4.2	33.0	989.6
6	ドイツ語	0.96	0.83	0.75	3.8	78.6	173.1
7	アラビア語	3.47	2.23	0.65	3.3	18.8	2,501.2
8	フランス語	3.48	0.69	0.60	3.0	17.2	398.2
9	ロシア語	1.39	1.62	0.60	3.0	42.8	1,825.8
10	韓国語	0.71	0.66	0.39	2.0	55.2	107.1

（出典： ウィキペディア「インターネットにおける言語の使用」）

注) 元データ: Internet World Stats (<http://www.internetworldstats.com/stats7.htm>)

母語話者人口は、Ethnologue (<http://www.ethnologue.com/>) から2013年のデータを使用。

表2 ウェブサイト上の言語の分布の推移

年 \ 言語	英語	中国語	日本語	スペイン語	ドイツ語	フランス語	その他
年	2000	2005	2011				
2000	39%	9%	13%	7%	8%	3%	21%
2005	32%	13%	8%	7%	6%	4%	30%
2011	27%	24%	5%	5%	4%	3%	32%

(出典：インフォグラフィック News、2012年5月30日。3重の円グラフでデータが表示されている。
<http://jp.startup-dating.com/2012/05/dominant-languages-on-internet-english-chinese>)

注)「その他」には、2011年の場合、ポルトガル語(4%)、アラビア語(3%)、ロシア語(3%)、韓国語(2%)などが含まれる。2000年および2005年も、大筋において同様である。

表2は、ウェブサイト情報の言語分布を示したものであり、2000年、2005年、2011年のデータが比較できる。多言語対応サイトの扱いについて元データには説明がないが、言語比率の合計が100%になっていることから、各サイトにつき主要言語1つを数えていると想定される。

中国語サイトの増加が著しく、2011年には英語サイトの比率とほぼ並ぶまでになっている。英語サイトは、イギリスやアメリカの他、さまざまな英語変種を含んでいる可能性がある。中国語も、数多くの方言を合わせたものである。他の言語が全体に占める割合は小さいが(数パーセント以下)、種類が豊富である。これは、ウェブサイトが、グローバルユーザへの情報発信だけでなく、ローカルユーザへの情報発信のためにも多く利用されることを示唆している。日本語のサイトが2011年現在において全体の5%を占めているのは、表1にあるように日本語のネット普及率が高いことと関連があるだろう。

ウェブサイトにおいても、言語の多様性は重要な意味を持つ。世界各地の情報も英語で得られれば、幅広い人々が読めるであろう。しかし、ローカルなユーザにとっては、その土地の言語(公用語やユーザの母語)で書かれる方が良いに違いない。意見交換も、母語が同じ者同士なら、母語でやりとりした方が正確で効果的にできる。さらに、各言語で書かれたサイトは、言語情報の資源としての価値もある。例えば、ドイツ語を学習中の日本語話者がドイツ語のサイトを覗いてみると、ドイツ語が母語話者によって実際に使われる様子を見ることができる。これは学習者にとって貴重な情報源となる。また、少数話者言語で書かれたサイトがあれば、そこにある記述はそれ自体、貴重な言語資料となる。情報発信や情報交換の空間がグローバル化すれば、多様な人々との共通言語が必要となり、言語の均質化が促される可能性も大きい。しかし上記の理由により、インターネット上でも言語の多様性を残すことが望ましい。そのためには、多言語サイトの作成などにより、言語の実用性と多様性のバランスを工夫する余地があるだろう。

世界遺産と時空間

ここまで考察では、グローバル化とローカル化を、空間的あるいは社会的な次元を中心とした。最後に、時間という新しい軸を含めてみよう。グローバル化を考える際、いわば水平方向の広がりだけでなく垂直方向の広がりにも注目するのである。世界遺産は、こうした多次元的な広がりの中で、グローバルな価値とローカル性との関わりを示している。

2013年6月、富士山が国内で17番目の世界文化遺産として登録された。登録名称は「富士山——信仰の対象と芸術の源泉」である。富士山域、数カ所の浅間神社、湖や池、白糸の滝、そして富士山を見渡す三保の松原などが含まれる。具体的には、①莊厳な富士山の形姿が、古代から山岳信仰の伝統を鼓舞し、多様な信仰の対象として崇拜されてきたこと、および、②富士山の図像は、古来から文学作品の創造的感性の源泉であり続け、また浮世絵に描かれた富士山は西洋の芸術の発展に顕著な影響をもたらしたことなどを根拠として、世界文化遺産の登録基準の3と6が適用された。

表3 世界文化遺産の登録基準

1. 人間の創造的才能を表す傑作である。
2. 建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値観の交流又はある文化圏内の価値観の交流を示すものである。
3. 現存するか消滅したかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在（少なくとも稀有な存在）である。
4. 歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である。
5. あるひとつの文化（または複数の文化）を特徴づけるような伝統的居住形態若しくは陸上・海上の土地利用形態を代表する顕著な見本である。又は、人類と環境とのふれあいを代表する顕著な見本である（特に不可逆的な変化によりその存続が危ぶまれているもの）。
6. 顕著な普遍的価値を有する出来事（行事）、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある（この基準は他の基準とあわせて用いられることが望ましい）。

(出典：日本ユネスコ協会連盟「世界遺産の登録基準」<http://www.unesco.or.jp/isan/decides/>)

表3を見ると、グローバルな価値を評価する基準の中に、「ある文化的伝統」、「あるひとつの文化（または複数の文化）」、「ある文化圏内の」、「ある期間にわたる」、「歴史上の重要な段階」など、ローカルな要素に言及する表現が含まれていることが興味深い。

もしもローカル性に言及しない形でグローバルな基準を設けようとなれば、「これまでに延

べ何カ国から何人の人が訪れたか」といった質問や、知名度や印象についてのアンケートなどに帰着するだろう。しかしそれでは物の本質的な価値を評価できない。世界遺産一つひとつの価値を適切に評価するには、ローカル性に言及する基準が必要になるのである。しかも、評価にあたって伝統や歴史を考慮することが含まれているので、ローカル性は時間軸を組み込むことになる。

したがって世界文化遺産とは、空間と時間の次元におけるローカル化とグローバル化の相互作用のうえに成り立つ文化的創造であり、人類の共有財産としての価値を見出し、作り出す営みであるといえるであろう。いうまでもなく、個人においても、ローカル化とグローバル化の相互作用を時間の次元を含みながら経験することで、普遍的価値を創造する可能性が広がっている。俳句や漢詩の文化的伝統と英文学の研究を結びつけながら、普遍的価値のある文学を生み出した漱石の事例は、まさしくそのような可能性を指し示している。

おわりに

「今・ここ」に存在する私たちは、世界全体で見れば限りなく小さい存在である。しかしそのような小さな要素こそが、さまざまな方法でつながって広大な世界を築いているのである。個人の存在そのものが、他とのつながりの上にあると言ってもよい。それに気がつけば、時空間的な世界の広がりに対して開かれた態度—遠心的なベクトル—を持たずにはいられない。

「世界のグローバル化が進む中」と言うとき、通常は、現在の人、物、情報の柔軟な交わりを指すだろう。しかし、私たちの内面的な世界においては、抽象化や類推や想像を通して、そのような交わりをさらに高次に発展させることができる。また、過去のものに見える歴史上の事物とも、動的で柔軟な交わりを持つことができる。個人の内面的なグローバル化は、世界のグローバル化と密接に関連しながら行われる、こうした主体的かつ創造的な行為として捉えられるのではないだろうか。その一方で、唯一無二の自己の内部を見つめてそれを高める努力—求心的なベクトル—も大切である。

個人は、主体的な行為としてのグローバル化とローカル化を組み合わせながら、世界とともに発展していくことができる。漱石の学びも、そうした構造を持っていた。そして個人は、世界遺産と同様に、ローカルな時空間に存在しながらも、時空間を超えてグローバルに影響力を持つことができる。

大学での学びは、さまざまな次元に存在する「個」と交わりながら自己を築いていく営みであり、それは、漱石の言う「錐」を得るために絶好の機会となろう。

参考文献およびウェブサイト

- 伊豫谷登士翁 『グローバリゼーションとは何か——液状化する世界を読み解く』 平凡社、2002年。
- 岡村圭子 『グローバル社会の異文化論——記号の流れと文化単位』 世界思想社、2003年。
- 夏目漱石 「私の個人主義」、『夏目漱石』筑摩書房、2008年。(本文中の引用では原文の漢字の使い方を適宜変更している。丸括弧内には漢字の読みや注釈を示し、「……」は「中略」を表す。)
- 正村俊之 『グローバリゼーション——現代はいかなる時代なのか』 有斐閣、2009年。
- Ariadne M. Borlongan, 'A survey on language use, attitudes, and identity in relation to Philippine English among young generation Filipinos: An initial sample from a private university', *The Philippine ESL Journal*, Vol 3, 74-106, 2009. <http://www.academia.edu/2521312/>
- Aaron C. Cargile and Howard Giles, 'Language attitudes toward varieties of English: An American-Japanese context', *Journal of Applied Communication Research* 26, 338-356, 1998.
- David Crystal, *English as a Global Language*, 2nd ed, Cambridge University Press, 2003.
- Andy Kirkpatrick, *World Englishes: Implications for International Communication and English Language Teaching*, Cambridge University Press, 2007.
- Mulkul Saxena and Tape Omoniyi, *Contending with Globalization in World Englishes*, Multilingual Matters, 2010.
- 富士山——信仰の対象と芸術の源泉 <http://www.heiwa-ga-ichiban.jp/sekai/sub/sub19.html>

(余白)

次の問題（1－40）には、それぞれa, b, c, dの答えが与えてあります。

各問題につき、a, b, c, dのなかから、最も適当と思う答えを一つだけ選び、解答カードの相当欄にあたるa, b, c, dのいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

例 ㊲

C a C b C C d

1. 資料1ページにある「人間は社会的動物である」と類似した言葉を残したアリストテレスの人間観として、最も適切なものは次のうちどれか。
 - a. 人間は真・善・美のイデアを求める憧れ（エロース）を持つので、徳をもって理想国家をつくるべきである。
 - b. 理想は実体のない形相に過ぎないので、人間は現実のポリスの中で友愛（フィリア）と正義を実現すべきである。
 - c. 人間にとての幸福は不快や苦痛から解放された快楽なので、利害や野心を捨て社会から隠れて生きるべきである。
 - d. すべての人間は理性的な存在として世界市民であり、理性に反する情念を抑制した禁欲的な生活をすべきである。
2. イギリスを皮切りとした産業革命がおこる中で、その原因としてではなくむしろ結果として生じたと考えられるものは、次のうちどれか。
 - a. アメリカ独立宣言が発表された年にアダム・スミスが『国富論』を著した。
 - b. 清教徒革命や名誉革命以降に商工業が発展し、資本が蓄積された。
 - c. 七年戦争によって北米やインドなど広大な海外市場や原料供給地を得た。
 - d. 囲い込みにより農業の生産力が高まり、近代農法による生産が始まった。
3. 19世紀末から20世紀初めにかけての列強による「世界の一体化」と「世界の分割」について、イギリスが関与したものは次のうちどれか。
 - a. フランスとドイツとともに三国干渉によって、日清戦争後に割譲された遼東半島を清に返還するよう日本に要求した。
 - b. 日露戦争後、フランスとロシアに接近して三国協商を形成し、互いに相手国の勢力圏を認めあって植民地支配体制の維持を図った。
 - c. 日清戦争後に分割された中国に対する市場進出をねらって、門戸開放通牒を列強諸国へ送った。
 - d. 鉄道建設や港湾整備を通じて中近東への進出を図るために、いわゆる3B政策をとった。

4. 資料1ページにある「反グローバル化」の例として、最も適切なものは次のうちどれか。
- チュニジアでは、ある青年の焼身自殺を契機として反政府デモが拡大し、国内外での民主化運動に波及した。
 - エドワード・サイードは、東洋を非合理的で後進的であるとする思考様式をオリエンタリズムと呼んで批判した。
 - アマルティア・センや緒方貞子は、さまざまな地球規模の課題から個々人の生命や生活を守るために「人間の安全保障」を提唱した。
 - 主要国首脳会議（サミット）の日程に合わせて、会場の近くの街頭で地球規模の格差を批判するデモが行われた。
5. 資料で用いられている中立概念としての「ローカル化」の例として、最も適切なものは次のうちどれか。
- 「限界集落」とも呼ばれる日本の過疎集落では、高齢化も進行して世代間の交流が減っている。
 - フランスや韓国の農民らは、農産物輸入関税の緩和に反対して、地元の資源を用いたローカル文化や伝統と調和した農業を目指すべきだとしている。
 - 「フラット化」した世界では、いわゆる「ガラパゴス現象」を避けるために、国内だけでなく海外向けの嗜好にも注目した商品やサービスを開発すべきである。
 - メコン川流域では、かねてより地域経済文化や自然環境の観点から経済圏がいくつも発生してきた。
6. 「マクロ／ミクロな視点」に関連して、「ミクロ経済学」の分野に該当しないものは、次のうちどれか。
- フランスのワル拉斯は、商品がだぶついた状態だと価格が下がり、品薄状態になると価格が上がって均衡価格が決まると考えた。
 - イギリスのマーシャルは、市場価格が高いと消費者は購入を控え、安くなければ沢山購入する一方、企業は市場価格が高いと利益が上がる所以生産量を増やし、安くなければ生産量を減らすので需給量が決まると考えた。
 - イギリスのケインズは、市場の調整力は不完全なので、政府が国民経済に介入することによって完全雇用の達成を目指すべきだと考えた。
 - オーストリアのメンガーは、労働ではなく満足（効用）にこそ価値があるとし、財の追加によって得られる効用は次第に減ると考え、じわじわと指値が詰まって均衡価格が決まると考えた。

7. 資料 2 ページにある「現地の言語の特徴をとりこんだ多様な英語変種」の例として、最も適切なものを選べ。
- 東京駅前の商業施設にエスペラント語でオアシスを意味する Oazo (オアゾ) が使われている。
 - ハイチでは、奴隸の言葉とされてきたクレオール語で書かれた詩やドラマが抵抗の象徴として見られるようになった。
 - ジャマイカのレゲエ・アーチストがパトワ語で Yah Man (ヤーマン) という挨拶をしている。
 - 2002 年に独立した東ティモールでは、Timor-Leste (ティモール・レスト) という通称が使われている。
8. 資料 2 ページに女性の社会進出について「日本に固有の問題」とあるが、性差別は世界的に構造化された問題でもある。北京で第 4 回世界女性会議が開催された 1995 年に日本が実現した取り組みは、次の中のどれか。
- 女性差別撤廃条約を批准した。
 - 育児休業法を改正した育児・介護休業法によって介護休業制度が法制化された。
 - 男女共同参画社会基本法が公布・施行された。
 - 男女雇用機会均等法を改正し、「女性への差別」から「性別を理由とした差別」へと対象が置き換えられた。
9. 資料 2 ページに述べられた意味での「グローバル化がローカル化を促す」最も適切な例は、次のうちどれか。
- 人形浄瑠璃がヨーロッパ各国で公演されて大好評を博した結果、日本国内でも人形浄瑠璃に対する興味や評価が多様な世代で高まったこと。
 - 国内外のさまざまな分野で活躍している人々が、高校の同窓会に集まり、クラブ活動や文化祭などの思い出話に花を咲かせること。
 - ローカル線が廃止されることになり、SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) でそれを知った鉄道ファンが、名残を惜しんで記念乗車や写真撮影に多方面から集まること。
 - 地域の文化や芸術を海外に紹介する国の支援事業が多岐にわたり、財政負担も増え続けているため、対象事業や対象国が絞られることになったこと。

10. 資料2ページにある「個人の内面のグローバル化」に該当するものを、次の中から選べ。
- a. 日本人の大学生が、日本企業に就職しようかと迷った末、より高収入の外資系企業に就職したこと。
 - b. 日本人の大学生が、海外留学中の日本人の友人に、日本国内の景気や就職の状況について知らせたこと。
 - c. 日本人の高校生が、国語の時間を削って英会話とリスニングの勉強にあてる割合を増やしたこと。
 - d. 日本人の高校生が、マララ・ユスフザイさんの国連での演説を聞いて、大学で学ぶ意義を見つけたこと。
11. 「内面的なグローバル化」について筆者がとる立場として、最も適切なものはどれか。
- a. 周囲との物理的な交流が制限されている状況ほど活発化する。
 - b. 周囲との物理的な交流が盛んほど活発化する。
 - c. 周囲との物理的な交流が盛んでも起こらない場合があるし、制限されていても可能である。
 - d. 周囲との物理的な交流が制限されているかどうかに関係なく、時間が経てば常に可能である。
12. 夏目漱石による講演「私の個人主義」では言及されなかったと思われるものは、次のうちどれか。
- a. 自己の個性の発展を仕遂げようと思うならば、同時に他人の個性を認めなければならないこと。
 - b. 自分の所有している権力を使用しようと思うならば、それに付随している義務を心得なければならないこと。
 - c. 自己の金力を示そうと願うなら、それに伴う責任を重んじなければならないこと。
 - d. 自由を天賦人権として捉えるならば、もっぱら自己の幸福追求を優先させなければならないこと。

13. 漱石が生まれた翌年の明治維新当初は、国民に対する「五箇の掲示」でキリスト教が禁止されたが、1873年には明治政府はその高札の撤去を布告することになった。その理由として、最も適切なものはどれか。
- 廃仏毀釈によって、仏教が外来の宗教であるとされたから。
 - 西欧文明と一体不可分の宗教なので、文明開化政策と矛盾したから。
 - 五箇条の誓文には、キリスト教禁止が明示されていなかったから。
 - 神仏分離令によって、神道を国教とする方針が正式に決まったから。
14. 漱石が留学したロンドンにある旧グリニッジ王立天文台を基準点とする子午線や経線の記述ではないものは、どれか。
- 北極星や太陽の高度を測定することによって比較的容易に求めることができ、コロンブスはこれに沿って移動することで新大陸を発見した。
 - スペインとポルトガルが締結したトルデシャリス条約は、ローマ教皇が設定した線で新世界における領土分割方式を取り決めた。
 - 出発地と航海先の現地との時間差から計算することができるため、性能と精度の高い時計の改良によって測定することができた。
 - 地球の自転は1日で360度と見なせるので、1時間につき15度の割合でこの線の差に置き換えられる。
15. 資料3ページの漱石の言葉にある「時代が時代だから」とは、具体的にどのような内容を表していると考えられるか。次の中から最も適切なものを選べ。
- 民衆のあいだでは、熱狂的な「ええじゃないか」の集団乱舞が流行していた。
 - それまでの儒教や神道による考え方や古い習慣が時代遅れとして排斥されていた。
 - 『古事記』や『日本書紀』などの研究が進み、日本古来の道を説く国学が発達していた。
 - 吉野作造が民主主義を提唱し、大正デモクラシーの立役者となった。
16. 漱石の「自己本位」の考え方最も適合しているものは、次のうちどれか。
- 身内や他人がいろいろなことを言っても、自分の資質については自分自身が一番よく知っているものである。
 - 学問をする者にとっては、協調性よりも独自性が最も大事である。
 - たとえ有名な学者が言ったことでも無批判に受け入れず、自分の頭で吟味すべきである。
 - 他人の説と自分の説が違う場合でも、自分の説が正しいという信念を貫くべきである。

17. 夏目漱石が『吾輩は猫である』の執筆時に影響されたとされるニーチェの著作について、正しい記述はどれか。
- a. 『存在と時間』において、人間存在の意味を時間性に探究する実存哲学を展開した。
 - b. 『存在と無』において、現象学的な立場から即自存在に対する対自存在としての人間の存在論を試みた。
 - c. 『判断力批判』において、美学的判断力と目的論的判断力とその結合について論じた。
 - d. 『ツアラトウストラはかく語りき』において、「神は死んだ」と宣言してキリスト教の神に代わる超人を理想とした。
18. 夏目漱石が参禅した鎌倉の円覚寺について、正しい記述はどれか。
- a. 北条時宗が中国より無学祖元を招き、元寇による殉死者追悼のために建立した臨済宗の鎌倉五山の1つである。
 - b. 踊念佛や遊行で知られる一遍の生涯が描かれた『一遍上人絵伝』を所蔵する、時宗の總本山である。
 - c. 北条時頼に「立正安国論」を提出した日蓮と、北条時政に滅ぼされた比企一族の供養のために建てられた日蓮宗最古の寺院である。
 - d. 北条時頼の寄進を断り、ひたすら坐禅に徹することを説いた道元が山中に建てた曹洞宗の寺院である。
19. 資料5ページにある「明治維新の時代を生きた漱石の話には、現代のグローバル化社会に生きる私たちにとっても新しいメッセージが多く含まれている」とは、具体的にどのような意味か。次の中から最も適切なものを選べ。
- a. 国をあげて西洋化を推進した時代に、漱石が自分の苦労や批判的な考え方を率直に述べたことは、画期的であり、今なお高く評価されている。
 - b. 明治維新と今日の状況とは構造的に類似している部分が多いため、漱石が話したことは現代の私たちにとっても大いに参考になる。
 - c. 文豪であった漱石の話は、若者たちに大きな知的刺激を与え、それに比類する影響力を持つ講演は、現在に至るまで多くは見られない。
 - d. 漱石の話は、講演会で直接聞いた人々には大きな影響力を持ったが、それ以外の人々にはあまり知られずに埋もれている。

20. 資料5ページで言及されている「言語態度」の調査結果を反映している内容は、次のうちどれか。
- 海外生活していた際に掃除機のお客様相談窓口に電話したとき、担当者が日本語なまりの英語で話したので、その人に親しみと信頼を感じた。
 - 国際学会で日本人が日本語的なアクセントの英語で発表すると、研究成果が過小評価される可能性がある。
 - アメリカの大学でティーチング・アシスタント（授業の助手）として働く場合、英語が流暢でなくても、専門分野の学力が高ければ、学生からの信頼は厚くなるだろう。
 - 日本人が海外でボランティア活動のリーダーとなる場合、流暢な英語が話せなくても日本語なまりが小さければ良い。
21. 資料5ページで、筆者は、グローバルに普及する英語と漱石の英文学をめぐる経験とに関連があることを示唆している。その関連として最も適切なものを次の中から選べ。
- 言語や文化をできるだけその分野に定着した方法や文脈で捉えると、ローカルな視点をより深く洞察することができる。
 - 言語や文化は母語話者と全く同じように習得することはできないため、非母語話者としてわりきることにより自己本位の「錐」を獲得することができる。
 - 言語や文化が非母語話者の視点から捉え直されることによって、それらの対象が新しい方向に発展しうる。
 - 非母語話者としていろいろな言語や文化をありのまま受入れることで、自らの内面的な発展としてのグローバル化を遂げることができる。
22. アメリカの植民地時代に英語が導入されたフィリピンと同様に、イギリスによる植民地政策で英語が導入された国を選べ。
- チュニジア
 - リビア
 - シエラレオネ
 - アンゴラ

23. 筆者によればグローバルなコミュニケーションの手段がイギリス英語とアメリカ英語に限定された場合に生じる問題のうち、最も本質的な問題は何か。
- 世界全体で見れば、イギリス英語やアメリカ英語を学べる環境にある人々は限られているため、共通語としての英語が普及しにくくなる。
 - イギリス英語とアメリカ英語の母語話者が、文化面も含めて「標準」と見なされ、グローバル・コミュニケーションにおいて優位に立つことが懸念される。
 - 英語の均質化が進行する結果として、さまざまな話者の個性が見られなくなることが懸念される。
 - イギリス英語とアメリカ英語が世界共通語になると、それらの母語話者たちが言語的なアイデンティティを失ってしまう。
24. 資料6ページの「英語使用環境のグローバル化が、英語の種類や評価についてのローカル化をもたらしている」の意味として、最も適切なものはどれか。
- 英語が世界各地で話されるようになった結果、さまざまな英語変種が生まれた。そのうち特定の数種類が、グローバルなコミュニケーションで受け入れられている。
 - 英語が世界各地で話されるようになった結果、さまざまな英語変種が生まれた。しかし、それらはグローバルなコミュニケーションでは通用せず、一種の現地語としてのみ使われている。
 - 英語がさまざまな人々によって話されるようになった結果、話し手ごとに発音や表現スタイルが多様になった。その多様性は、話し手の個性として尊重されている。
 - 英語が世界各地で話されるようになった結果、さまざまな英語変種が生まれ、それぞれの存在価値も認められるようになってきた。
25. グロービッシュ (Globish) とは、何か。
- 世界各地で話されるようになり、グローバル性が高まった国際補助語としての英語。
 - 英語の母語話者が非母語話者のコミュニケーション内容を理解しやすいように開発されることが望まれる、発音が平易な英語。
 - 世界各地で話されるようになった結果、それぞれの地域言語と結びついた英語変種。
 - いろいろな言語的背景を持つ人々が英語を話せるようになることを図って考案された、文法や語彙などが平易な英語。

26. 次のうち、表1と表2から確実にわかる内容は、どれか。
- 2000年～2010年の間にインターネット利用者数が最も増加した言語はアラビア語である。
 - 中国語のインターネット利用者数は、2000年当時は、約3,500万人であった。
 - インターネット普及率の高さにもかかわらず、英語で記述されたウェブサイトの数は、2000年、2005年、2011年と減少し続けている。
 - インターネットが世界的に普及するにつれて、ウェブサイトの言語情報分布は言語の母語話者的人口比に近づく傾向にある。
27. 資料8ページの「日本語のサイトが全体の5%を占めているのは、表1にあるように日本語のネット普及率が高いことと関連があるだろう」という記述において、筆者が前提せずかつ意図もしていないと考えられるものを、次の中から選べ。
- 日本語サイトはすべて、日本語学習者ではなく日本語を母語とする話者によって書かれていると推測される。
 - 日本語サイトのほとんどは、日本語を母語とする話者によって書かれていると推測されるが、それ以外の話者によって書かれている可能性もある。
 - 日本語を公用語とする国の人々は、実際にはほとんど日本語母語話者であり、サイトを作る場合はまず日本語で作ると推測される。
 - ある言語のネット普及率が上がれば、その言語で書かれたサイトの数も増えると推測されるが、両者に厳密な比例関係はない。
28. 表1によれば、日本語のインターネット普及率は78.2%であるが、もしも実際の状況とは関係のない純粋な仮定として、次の①および②を仮定すると、日本語のインターネット普及率は何パーセントとなるか。
- ①日本語の母語話者は全員インターネットを使用する。
②日本語の母語話者は、インターネットを使うときには必ず英語を使う。
- 100%
 - 50%
 - 0%
 - 与えられた情報だけからはわからない。

29. 上記の設問と同様に、次の①および②のことからを仮定する（実際の状況とは関係のない、純粋な仮定である）と、英語のインターネット普及率は何パーセントになるか。
- ①日本語の母語話者は全員インターネットを使用する。
②日本語の母語話者は、インターネットを使うときには必ず英語を使う。
- a. 100%
b. 50%
c. 0%
d. 与えられた情報だけからはわからない。
30. 資料8ページで、筆者が「インターネット上でも言語の多様性を残すことが望ましい」と主張する理由として言及されていないものは、どれか。
- a. インターネット上の言語の多様性が参加者の多様性を表す役割があるから。
b. 消滅の危機にある少数話者言語の資料として残すことができるから。
c. ローカルなユーザにとって現地語での意見交換が容易になるから。
d. 多様な言語情報は、語学学習にも活用できるから。
31. 世界遺産条約にある「全人類の世界遺産」と類似した概念で、国際法において「人類の共有財産」と明文化されているものは、次のうちどれか。
- a. 国連海洋法条約における深海底とその資源
b. 国連気候変動枠組条約における温室効果ガス吸収源としての森林
c. 国連生物多様性条約における遺伝資源
d. 世界貿易機関（WTO）協定における知的財産
32. 富士山と同じ登録基準の3と6のみが適用された世界文化遺産は、次のうちどれか。
- a. 白神山地（日本）
b. タージ・マハル（インド）
c. 周口店の北京原人遺跡（中国）
d. アテナイのアクロポリス（ギリシャ）

33. 資料9ページに「浮世絵に描かれた富士山は西洋の芸術の発展に顕著な影響をもたらした」とあるが、富士山が描かれた浮世絵の影響を記述したものは、次のうちどれか。
- 歌川広重の「名所江戸百景 大はしあたけの夕立」を模写して、ゴッホが「ジャポネズリー：雨の橋」を描いた。
 - モード系のファッション・デザインに東洲斎写楽による独特のデフォルメの残影が見られる。
 - ドビュッシーの交響曲「海」の初版楽譜の表紙に、葛飾北斎の「神奈川沖浪裏」が描かれた。
 - 喜多川歌麿の浮世絵を収集していたモネの作品「ラ・ジャポネーズ」にその影響が見られる。
34. 日本政府が現代の「浮世絵」とも言われるマンガやアニメなどの文化産業やコンテンツ産業を支援するのと同様に、主に経済的な理由から権力者が芸術振興を図った例は次のうちどれか。
- 中国で文化大革命を推進した江青が、伝統的な京劇や西洋バレエを排斥し、革命現代京劇や革命現代バレエを推進した。
 - イタリアでフィレンツェの金融財閥メディチ家などがパトロンとなって、ルネサンス文化が栄えた。
 - アメリカでルーズベルト大統領が、ニューディール政策の一環として芸術家たちを支援する計画を実施した。
 - イスラーム圏では宗教と学問や芸術が一体的なものとされ、カリフやスルタンたちが文化活動を積極的に保護した。
35. 富士山が世界文化遺産に登録されたことを、資料の筆者はどのように捉えていると推測できるか。最も適切なものを次の中から選べ。
- ひときわすぐれた富士山の自然美が、数十万年前からの噴火活動によって生じた地球の歴史上の典型的な成層火山の過程としてグローバルに共有されることを期待している。
 - 世界遺産に登録されたことによって国内外からの観光客が急増し、ゴミ問題などが再発する可能性があるが、むしろ経済効果によって環境保全のための財源も大きくなることを期待している。
 - 富士山を見渡す三保の松原を含む構成要素が登録されたことで、ローカルな日本の伝統や思想がグローバルな価値を持つものとして認識されることを期待している。
 - 将来的には、グローバルな自然遺産の要素とローカルな産業遺産の要素を併せ持つ複合遺産としての登録が検討されることを期待している。

36. 「グローバル」という概念の一般的な捉え方と、筆者の捉え方とはどのように特徴づけられるか。次の中から最も適切なものを選べ。
- 一般的には空間的あるいは文化的、社会的な意味で使われるが、筆者はさらに時間的な広がりにも適用している。
 - 一般的な捉え方と同様に、筆者も文化的あるいは社会的な広がりとして捉えている。
 - 一般的な捉え方と同様に、筆者も空間的、文化的、社会的、時間的な広がりに対して用いている。
 - 一般的には空間的な広がりの意味で使われるが、筆者は時間的な広がりにも適用している。
37. 資料で議論されているグローバル化とローカル化の相互作用を、時間の次元に適用した場合に言えることを、次の中から選べ。
- 過去や未来は思考の中に存在し、現在だけが現実の中に存在する。したがって、「今・ここ」に存在する自分だけに焦点を集中させることが実り多い時間を過ごすための「錐」となる。
 - 現存する自分や事象は、過去や未来とのつながりにおいてその位置づけが認識される。したがって、現在だけを切りとて考えても、それらに対する正しい理解は得られない。
 - 「歴史は繰り返す」と言われるよう史実は反復して認識される。したがって、現在のあり方を考えるとき、歴史上の出来事や遺産を注視することこそが基本である。
 - 過去について考えても既に生じた事実が変わるわけではない。したがって、未来のビジョンを具体的に思い描くことで現在のあり方の方向性が与えられる。
38. 資料の筆者は世界地理を学ぶ目的や意義をどう捉えていると推測されるか。資料全体の内容に即して、次の中から最も適切なものを選べ。
- 世界各地の人々が自分たちの国や地域における生活や文化の地域的特色についての理解を深め、共通の課題に対する特色ある解決策を共有すること。
 - 国境にとらわれない観点から自然環境や社会環境の一体性を理解し、民主的で平和なグローバル社会を形成する市民としての自覚や資質を養うこと。
 - 現代的な視点に歴史的な視点を補って、世界の国や地域ごとに存在する自然、人々、社会、文化、産業などの多様性とダイナミズムを理解すること。
 - 現代社会と自己との関わりの次元を扱う政治経済や倫理、あるいは時間的な次元を扱う歴史と対照的に、空間的な次元で世界を把握すること。

39. 「世界を構成するさまざまな要素とのつながりの中で、個人はどのような発展性を持っているのだろうか」という資料冒頭の問い合わせに対して、筆者はどのような考え方を示しているか。最も適切なものを次のなかから選べ。
- 多様な文化や価値観に接して自己を相対化することと、自分の直観や主体的な思考を大切にすることの両方が、内面的成長にも対外的な発展にも重要である。
 - 物事が没個性化していく傾向にあるため、私たち一人ひとりは他人と違う自己の差異化を図っていくことが望ましい。
 - 企業や集団だけでなく、個人同士も地球規模で交流し、互いの文化的・精神的な共通性を高めて一体化していくことが、グローバル社会を生きる上で重要である。
 - 人、物、情報などが地球規模でめまぐるしく動いている時代であるため、個人は、職業においては地球規模で活動し、人間的には自己の内面を磨くのが理想的である。
40. この資料にタイトルをつけるとしたら、次のうちどれが最も適切か。
- グローバル・コミュニケーションの多様性
 - グローバル化時代における「個」のあり方
 - 個人の内面のグローバル化
 - 時空間から見たグローバル化

(余白)